

浄土

法然上人鑽仰会

合併号

February

23

March

2010

monthly
JODO

親法



今現在



あなたへ

あなたに 伝えたい事、たくさんあるの
いつも ありがとう
もう 何度も聞いて しつこいかもしれないけど、
ごめんね。
私には それくらいしか 言えなくて……
これからも よろしくね
私は 母さんに 何百何千何万 それ以上の
ありがとうを送ります。

P.9にプロフィール

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の

1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

2・3月の書

今現在説法

阿弥陀佛が今現在お説法
されています。

このお経の説いている世界は、決して
昔のお話ではありません。現在、只今の
ことです。

私たちのこの肉体という命が終わった
とき、正に往生する場所である、西方極
楽世界の様子が説かれているのです。

そこでは、今この時に、阿弥陀佛がお
説法されているのですと、お釈迦様が
お話しになっているのです。

往生を遂げたとき、そこで私たちも阿
弥陀佛にお会いできるのです。(編集部)

浄土

2010/2・3月合併号 目次

法然上人のお念仏 (第5回).....	阿満利磨	2
茜の詩プロフィール.....		9
会いたい人 平幹二郎さん②.....	関 容子	10
連載小説 渡辺海旭 (12).....	前田和男	18
響流十方.....	林田康順	26
江戸を歩く.....	森 清鑑	30
阿弥陀さま (最終回).....	佐藤春夫	40
Jフォーラム.....		43
浄土句会.....	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ.....	かまちよろう	47
編集後記.....		48



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会
主催
講演会

法然上人の
お念仏

第5回

法然上人の お念仏

阿満利磨

第五回

夏目漱石の有名な「こころ」という小説の中に「世の中に悪人という人はいない。善人という人が突如悪人になるから恐ろしいんだ」という言葉があります。あれは私どもの無意識が「私」に反乱するから、突如私は悪を犯す存在になる。そういうことを浄土仏教では、「業縁のしからしむるところだ」と言ったりもします。

要するに、無意識だと言っても、一つは煩惱の巢窟であるという一面がある。しかし、仏教はその中に仏になる可能性があるんだと、種があるんだとも教えているわけです。

それでは、今、言ったように、どうしたら無意識の中の仏を開発することができるのかという問題があります。それを前号でお話しした元照の言葉で言えば、「名号を聞く」、「名号を口で称える」。そのことによって名号の持っている徳が、つまり、阿弥陀仏が名号そのものになっておられるということ、その名号になって私たちの無意識の中に入ってきてくださるのだということです。

これを唯識風に言えば、「名号を称える」ということは、「南無阿弥陀仏」と言うと、直ちにそれが無意識に転写される。写される。そして、無意識にそれがどんどんたまっていく。そして、最後はこの煩惱の巢窟、煩惱を全部追い出して、全部仏になる種だけになってしまふ。そうすると、仏様になるというわけです。

それは浄土仏教の教えでは、死んでからなんです。残念ながら。生きている間に仏になることはできないのです。死ぬとなぜ仏になれるかというと、煩惱の巢窟である肉体が滅びるからです。肉体があるがために、私どもはどうしても煩惱から自由になれない。したがって、肉体を捨てないと仏様になれない。大変悲しいことのようにけれども、とても安心できる教えです。

この世で「仏さんだ」などと言う人がいたら、それはうそなんです。だれもこの世で仏さんなどになれやしないんですから。それはとても大事な条件なんです。

そのように、「この世では仏にはなれない」と決めた上で、その仏になれない私たちがどうして仏になれるのかという道を考えたのが浄土仏教というものです。

ですから、名号というものは我々の無意識に働きかける、そういう大きな役割も持っているんだと思います。そのように無意識ばかりを強調すると阿弥陀さんがどこかに行ってしまうように思います。ですから、法然上人は「念仏の相続」ということを大変やかましく言われたのです。

念仏は一回切りで終わるというものではなくて、念仏は相続せよと。念仏は続く、念仏を続けるということが大事である。念仏が念仏を招き、さらに、また念仏を招いていく。こういう念仏の暮らしが大事だということを、法然上人が非常に強く主張されたということとは、この元照流の説明、つまり、唯識的な説明をすれば、名号が私どもの無意識に仏となる種をまいてくださるんですから、それはたくさんまいてくださるほうがいいに決まっている。そういうことを示しているのでしょう。

もう一つ申し上げたいことは、この念仏は私の中で阿弥陀さんが働いているわけですから、「念仏をする」ということは仏道を歩んでいるということになるのです。これについて、私たちはもっと自信を持っていいわけです。

お念仏を称えるということは仏道を歩んでいるということです。仏様の道を歩みつつあることなんです。皆さんの中には、念仏をしているだけで何かもの足りないと思われる節があつて、もうちょっとほかのことをしていないと仏道を歩んでいる、仏様の教えに従

って生きているとは思えないという錯覚をどうも起こします。

だから、念仏をしても、念仏をしても、何か頼りないから写経してみようとか、あそこは坐禅を何日間か集中しておやりになるようだから、そういうところへ行ってみようとかいろいろなことを考える。今、自分が念仏をしているということは、仏の道を歩んでいるんだということをずっと自覚すれば、これはすばらしいことなんです。

実際にこの念仏を続けていると、二つの智慧がわいてきます。これについて、法然上人は明確には述べておられないですが、弟子の親鸞などは非常にそういうことを強く意識するようになっています。念仏をするようになると、こんな凡夫ほんぶではあるが、二つの智慧が何だかわいてくるようになるわけです。

一つは、「自分と他人を平等に見る」という智慧が生まれてくる。かわいいのは自分です。どこまで行ってもかわいなのは自分であるけれども、あの人も自分と同じくらいかわいい存在である。

そのように自他平等が実行できるわけではありません。どこまでも私たちは自分中心なんです。死ぬまで自分中心なんですが、それでも今までよりは他人のことを自分と同じような存在だと思うことができる。あるいは「自分と他人とは一緒なんだ」と願うことができるようになる。それが一つの智慧です。

もう一つは、「自分と他人は違う」ということです。それがよくわかるようになってくると、この「自分」と「他人」とが違うということは、なかなか日常生活では難しいことです。

親は子どもにいろいろな要求をする。しかし、その要求の中身というのは、大体親の願

い子どもにぶつけているだけなんです。自分は余り勉強できなかったことを棚に上げて、子どもは勉強できるものだと思って「もっと勉強せい、勉強せい」と言うのは、親の常であります。

自分と他人は違うということはわかつていなければならないのは私たちです。だから、自分と他人とは違う。これを法然上人の言葉で言えば、「それぞれが背負っている業が全部違う」ということです。そのことが少しづつわかるようになってくるわけです。

ですから、念仏をしていて「十把一からげ」になるということは余りないわけです。念仏するようになれば、一人一人違うから、十人を全部一くくりにしても平気だということとは難くなるでしょう。

また、スローガンで「人間はこうすべきだ」というような議論に賛成というふうにはなかなかいきません。だから、念仏者は世の支配者からするとちよつと扱いにくい存在にだんだんなっていくのです。

でも、この二つの智慧が凡夫であるけれども、それなりに見え始める。そうすると、この「慈悲の実践」ということもまた生まれてくるわけです。慈悲を実践するということは、相手と私が同じだという気持ちが必要だだし、また、相手と私が違うということがわかっていないと、その人に一番ふさわしい方法を考えることもできません。

この二つの智慧というのは、念仏をしながらですが、生きながらにして、仏様にならないくとも、仏になりつつある仏道を歩む我々にも、そういう智慧がちよつとづつわいてくるのではないかということを、親鸞などは強調しているわけです。

それは親鸞が法然上人よりも長く生きましたから、法然上人のおっしゃっている念仏の意味を深めて、そういうことにまで気づいたのであります。でも、凡夫でありますから、今申し上げたように、「凡夫の慈悲」というのは矛盾だらけです。自分のいいときには人様に優しくできるけれども、気分がちよっとすぐれないとすぐ冷たく当たる。私たちの慈悲というのは、それはもう矛盾だらけであるということがわかるようになってくる。それがとても大事なことでしよう。

私は「二河白道（にがびやくどう）」というお話が好きですが、二河白道の話でどこが好きかというと、ご承知のとおり、二河白道というのは、いわば念仏道です。念仏を生きるということです。

念仏をしながら、念仏の暮らしを続けていくというあり方が「白道」ということだと思いますが、白道の中で述べられていることは、白道から落ちても落ちても恐れることはいないということです。白道から落ちても落ちても必ず浄土に到達することができるというところと説いているところとです。

普通の宗教は白道から落ちるなど、あるいは私の教えを信じたら白道から、仏の教える道から落ちないように守ってくれるというようなことを言います。

でも、法然さんのお念仏は、お念仏をしてその仏道を歩んでいくと、その仏道から落ちてしまう。その仏教の教えに違うようなことをしよっちゃうします。そういうことをしても、道はお浄土につながっているということを保証しておられるのです。

だから、この「落ちても落ちても救われる」と説いておられるというところはとてもありがたいのですが、この凡夫の仏道というのはそういうものなのです。「凡夫の仏道」と

いうのは、凡夫が踏み行ふ仏の道であるけれども、その仏の道はしゅっちゅう間違いを犯すような、「間違いを犯すことをどうして『仏道』と言うんだ」とおしかりを受けるかもしれないけれども、それは念仏によって歩む道だからです。

念仏をする私は凡夫でありますから、過ちを犯し続ける。しかし、念仏は阿弥陀仏の行為なのであるから、真っ直ぐにお浄土に向かって通じているわけです。ですから、その阿弥陀仏の行為である念仏を、私が落ちて落ちても、また私をもとの道へ連れて行ってくれる。そういう役割を果たしてくれるわけです。

念仏は「慈悲の実践」を可能にする根拠なんです。難しいことを言わなくても、念仏しているとおのずと慈悲の実践ができるようになってくる。その慈悲の実践は何も大したことではないんです。凡夫のやることだから大したことではないけれども、今言ったように、人と自分とは同じだと。人と自分とは違うというような智慧が働いてきて、少しずつ何か慈悲の実践というものが生まれるようになってくるのです。

阿満利庵（あまとしまろ）

明治学院大学名誉教授（2006年4月から）

仏教雑誌「連続無題」主宰

「法然の衝撃」「法然を読む」著者

近著「数異抄 注解・現代語訳・解説」(ちくま学芸文庫) (2009年5月刊行)



新納 茜 (にいの あかね)

平成3年4月8日、予定日より3ヶ月半早く848gの超未熟児として生まれる。そのため、未熟児網膜症となり、何度かの手術の甲斐なく全盲となる。高校2年生のとき、交通事故に遭い、意識不明の重体となるが立直るなど波瀾もあったなか、詩を書きつづける。

連 載

会いたい人 関 容子

平幹一朗

さん

2



撮影／タカオカ邦彦

平さんは俳優座養成所を卒業して、本当は文学座に入りたかった。俳優座のレパートリーよりも文学座の上演演目のほうが好きだったからだ、ちようどそのころ文学座の募集がなかった。

「ぼくの俳優座初舞台は、『貸間探し』という新しい中国の芝居で、貸間を探す若者のぼくと、貸したくない家主がいて……という社会主義的なテーマで、ぼくのやりたい芝居ではなかったですね」

実は私は平さんが初舞台から間もなくのころ、『タルチュフ』の衛兵で出ていた芝居を観ている。千田是也主演のモリエールのこの喜劇をまず俳優座劇場で観て、次に私が在学していた日本女子大の成瀬講堂で一日だけ公演があった日にも行った。当日は演劇好きの女子大生が切符のもぎりや場内案内係で協力したが、私は真つ先に楽屋のお世話係に名乗りを上げ、俳優たちが裸になって着換えたりする舞台裏の様子に興味深く見学した。

「じゃあ、千田先生の異様な役の拵えをじかにごらんになったわけですね(笑)。ひたいをすくく禿げ上がらせて、わざとらしいつけ鼻をつけて、青や赤でゴテゴテ描いて、そういうふうな役をデフォルメするのがお好きでした。ね。ぼくはその衛兵で、ある日大失敗をしているんです。終幕近く、タルチュフの悪事が露頭して逃げ出そうとするときに、外へ出られないようにもう一人の衛兵と槍でガチツと出入口をふさぐんですけれど、それが先生のつけ鼻に当たってぼくの槍にくつついちゃったんです(笑)。大丈夫か? って小声で先生が訊くんですけど、もうどうしようもないので、ハイって言うって、でも幕切れだったのほとんど客席にはわかりませんでしたけどね」

私は楽屋係の役得で、千田是也さんと翻訳者の鈴木力衛氏にサインをしてもらい、そのとき近くにいた衛兵のハンサムなほうのお兄さんにもサインをもらった。あとでその平幹二郎がこんなに大きな存在になるなどと少し

平幹二朗

会いたい人

関 客子

「会いたい人」は、平幹二朗の代表作の一つ。この作品は、平幹二朗の演技力を大いに引き出した。平幹二朗は、この作品で、観客の心を捉えた。平幹二朗の演技は、観客の心を捉えた。平幹二朗の演技は、観客の心を捉えた。



平成14年、ル テアトル銀座での「鹿鳴館」で佐久間良子さんと共演する平幹二朗さん



平幹二朗の思い出

も思ってたかった。

ちなみにそのサインの入った私の大事な扇子は、ずつとのちに辻邦生さんと話していたら辻夫人が故・鈴木力衛氏の御親戚と伺い、フランス語のタルチュフのせりふの下に「偽のモリエール」とある洒落た鈴木氏のサインを私が自慢して、つい差し上げる羽目になり……、早まったことをした。

平さんが十一年間在籍した俳優座を辞める経緯については、今回初めて語ることだという。

「千田先生と小沢栄太郎先生の対立という複雑な事情がからんで、不思議なタイミングだったんです。あのころ主導権は当然千田先生にありましたけど、先生のレパトリーのプレヒトとかの前衛芝居は、装置にお金がかかる上にお客が入らない。一方の小沢先生はヨーロッパから帰って最初の演出がシェイクスピアの『十二夜』で、こっちはお客が入りそ

うな演目ですよ。ぼくはそのころ、東映の映画に出ることが多かったんで、端役をつけられたんですよ。撮影所が京都なんでなかなか稽古に帰ってこれない。ある日ようやく参加して、ひと言かふた言しかないせりふをつかえたら、お前は態度が悪い、芝居をなめてる、って稽古場でひどく怒られたんです。ぼくもいやになって、俳優座を辞めようかな、と思ったときに、田中千禾夫さんの『千鳥』という芝居の上演が決まって、千田先生がぼくにいい役をつけてくださったんで、辞めずにすんだんです。ぼくはその恩義を感じていて、お二人の対立のときは千田派になったんですね」

『千鳥』はどんな芝居だったかはつきり憶えていないが、平さんが片方の手をいつも白いスーツのポケットに入れていたことと、市原悦子の少女・千鳥の忍従を表す芝居の巧みさだけが強く印象に残っている。

「あのぼくの左手は、一幕目で東野英治郎さ

んによって刀で斬られてるんです。のちに生まれる千鳥の母親と一緒にいるときに。千鳥は祖父である東野さんに育てられて、何を言われてもただ『はいイ、はいイ』と暗い声で返事をする寂しい少女

平さんの「はいイ、はいイ」で、あの芝居の一場面が鮮明に甦った。それにしても、役者が声色を使うと本当にうまいものだ。

「千田先生にはそのあと『ファウスト』にも主役に抜擢していただいて、間もなく次の幹事会のメンバーを決める投票が行われることになったんです。そのとき小沢先生は東野さん以下、勢いを得ている小沢派のメンバーを引き連れて、大阪の公演に行っていました。われわれは見捨てられたように東京に残ってたんですが、もしも小沢さんに勝たせると、社会主義的な体質の劇団になってしまうという危惧がありそうだったんです。そこで東京に残った者だけで総会が開かれたときに、人前で物を言ったりするのが大の苦手のぼくが、

あのときだけは千田先生擁護の演説をぶつてしまったんですよ（笑）。投票は東京と大阪と分かれたまま行われて、結果として千田先生が勝ったんです。それで小沢先生は俳優座を新しく改革したいという計画が挫折して、先生も結局俳優座をお辞めになっちゃうんですよ。でも、この話はあくまでもぼくから見た状況ですからね。また当然ほかの見方もあるかもしれないけど」

しかし平さんが俳優座を辞めて次の飛躍のキツカケとなる浅利慶太演出の『アンドロマック』出演の橋渡しをしたのはほかならぬ小沢栄太郎だった。平さんはやはり強運の人だ。「俳優座の稽古場を建て直したりするのに、日生から援助を受けようということで、小沢先生が浅利さんと親しくなつて、それでぼくに『アンドロマック』に出るように、と小沢先生経由で話が来たんです。対立選挙の少し前ですよ。このラシーヌの作品は、ぼくと市原悦ちゃんと渡辺美佐子さんと目下武史さん

の四角関係みたいな芝居で、話題になりました」

当時、評判だった『アンドロマック』は日生劇場で私も観ている。続いて平さんは劇団四季の公演『ハムレット』にも主演したが、こちらは残念ながら観逃した。

このあたりから演劇人平幹二朗の名は一躍クローズアップされてくる。

「浅利さんから『ハムレット』の声がかかったんで、俳優座を辞めたわけなんです。しかし、あいつは商業演劇に走って、じきにダメになるぞ、って言われてたらしいですけどね」

フリーとなつて二年後の昭和四十五年、三十七歳のとき、NHKテレビの大河ドラマ『樫ノ木は残った』に主演。歌舞伎の『先代萩』だと悪役の仁木弾正に当る原田甲斐の役で、平さんの敬愛する森雅之が伊達安芸の役で共演した。

「俳優になりたてのころから、芥川比呂志さ

ん、森雅之さんという両先輩に注目してました。父親が芥川龍之介、有島武郎と聞いただけでドキドキする。都会的だし、育ちのよさとかインテリの匂いとか、ぼくにはないものを感じてあこがれました。森さんと伊達安芸で共演したときは、何回かかなりからむ場面があったのに、その気持ちを伝えればいいんだけど、心にじつと秘めて（笑）、何も言えない。芥川さんも一回だけ出演しておられて、これは甲斐が若いころに山の洞窟で仙人ふうの人に会って、人生について語ってもらうシーン。このときも何も私語は交さなかった。何か言えどもっと違う進展があったかもしれないのに、もったいないことをした、と今になって思いますね」

原田甲斐の母親役には、田中絹代が出ていた。

「ぼくの大好きな田中絹代さん。最終回で、甲斐が乱心者として扱われて死んだあと、母親が所払いになるんですが、原田家の門は青



佐久間良子さんとの間に生まれた長男の平岳大さんも俳優となり、「鹿鳴館」で共演した。

竹がぶつ違いになって閉ざされていて、潜り戸から出て歩み去るシーン。このカットを撮る前の日から田中さんはいっさい飲食をお断ちになって、眠らないで臨まれたそうで、本当に憔悴し切った感じがよく出ていらしたんです。甲斐が始末されるシーンは、その翌々日あたりに撮影があつたので、ぼくも田中さんを見習ったら少しはうまく出来るかと思っ

て、前の日は飲まず食わず眠らずでした。ず

つと眠らずにいると眼が充血してきますよね。それが狙いでした。最後のシーンは長いカットなんです、大勢に刺されて瀕死の甲斐が、さつき乱心を装ってわざと刺した伊達安芸のところへ、畳に爪を立てて這いながら近寄って行く。これは甲斐一人の乱心でござるぞ……つまり自分一人が悪人になってお家騒動を無事におさめたわけですが、私の真意がわかりですか？ と森さんの眼をじつとのぞきこむ。そのときのぼくの眼を血走った眼にしたかったんです。眼のアップのときに、眼にグツと力を入れたら、眼球にパアッと血が浮かんだんですよ。そこをカメラマンがうまく撮ってくれて、すごく効果的でしたから、あ、田中絹代さんの真似をしてよかった、と思いました(笑)。森さんもいい芝居で受けてくださった、あれは素敵な眼でしたね」

平さんは昭和四十四年、『樫ノ木』の撮影が半分ほど終ったところに、女優佐久間良子と

結婚した。

「そうしたら、ファンレターがとたんに半分に減りました(笑)。彼女とはテレビドラマ『皇女和の宮』で共演して知り合って、ぼくが珍しく勇気を出して誘って『短くも美しく燃え』という映画と一緒に観たんです。次が『お吟さま』で共演して、結婚に至るんですが、俳優同士の結婚というのは時間帯が大幅にずれたりしてうまくいかなかったのかもしれない。やはりぼくは子供のころから一人でいるのがらくというのが身についてしまっているんでしょね。でも、結婚五年目で子供が生まれて、息子の岳父はやがて俳優になって、『鹿鳴館』では元妻の佐久間さんとぼくと息子の共演が実現していますから、やっぱり結婚してよかった、と思っています」

(つづく)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第十二回

異色の外交官・
寺崎太郎 その1



日米開戦の 回避にやぶれ

昭和二十六年二月二十五日、日曜日の午前九時すぎ。新宿中村屋の大女将・相馬黒光ら、これまでの海旭ゆかりの人々とはちがつて、どうせありきたりの偉人伝だろうといささか懐疑的な態度で、NHKのラジオ番組「光を掲げた人々」に耳を傾けようとする男がいた。ニューヨーク総領事・アメリカ局長として、日米戦争回避にむけて、対米主戦論者の松岡洋右に盾突いてマツチ箱を投げつけられ、矢折れ弾付きて昼から自棄酒をおおって職を辞した豪傑、ケンカ太郎こと寺崎太郎である。

芝中時代から、いや芝に入る前の麻布筈小学校時代から「きかん坊」だった寺崎は、海旭のような「偉いお坊さん」が苦手だった。芝を卒業して一高から東大へ進み、念願の外交官試験にパスしたときも、さっぱり褒めてくれなかった厳しい父親と海旭がどこか重な

るからなのかもしれない。

酒も煙草も女もやらずの戒律三昧、たしかに高潔かもしれないが、世界をかけめぐっては権謀術数をめぐらす自分のような稼業にはあまり参考にはならない、というのが寺崎の偽らざる気持だった。

だから、こうして三代校長の海旭がラジオドラマにとりあげられるむねのお触れが母校の同窓会からまわってきたも、おそらく第一線にいたら、無視していたことだろう。しかし、このときの寺崎は二度目の「素浪人暮らし」で、時間ならたつぷりとあった。戦前は、第二次・第三次近衛内閣時、アメリカ局長として対米戦争回避のために粘りづよく交渉をつづけたが、近衛内閣が主戦派の東条英機内閣にとって代わられるのに先立って「これで日本は負ける」と野に下り、小田原に逼塞^{ひつそく}。寺崎の予言どおりアメリカに敗北した後は、マッカーサーを後ろ盾に首相となった吉田茂に拾われて外務次官に抜擢されるが、吉田の

対米追従に嫌気がさしてまたしても吉田内閣総辞職に先立って辞任。再度の下野後は「寺崎外事問題研究所」を起こして、外交啓蒙誌『れいめい』を発行。全国各地で講演を行なっているが在野からの提言活動を展開していた。

というわけで、ひまつぶしのつもりで聞き始めたラジオドラマだったが、冒頭のドイツ留学時代のエピソードで「おや」と思った。なんと、お釈迦様のお悟りの日にかこつけて海旭の日本人留学生仲間でビールパーティを開催。しかも、音頭をとったのが海旭というのだ。「ほんとかいな」と寺崎はつぶやいていた。芝中入学以来四〇余年間抱いていた海旭のイメージが寺崎のなかでちょっとゆらいだ。

しかし、海旭の留学時代のエピソードがかわると、「リーゼントにフロックコート」という出で立ちから「剃髪に袈裟ごろも」にがらりと変身、当代随一の学僧としての精進ぶりが語られはじめた。

——やっぱり石部金吉屁もひらずのえらいお坊さんか。

寺崎はケンカ太郎らしい偽悪ぶった伝法な口調でつぶやくと、寺崎の中で一瞬身近に思えた海旭のイメージがふたたび遠のいていった。

赴任地英国で後輩と大いに海旭を語る

それにしても海旭のことを思い出したのは何年ぶりだろうか。そうだ、そうだ。あれはたしか昭和十一年（一九三六）、ロンドンに吉田茂駐英大使の下で書記官をしていたときだ。芝中と東大の三年後輩で東京市の係長だった磯村英一が訪ねてきた。なんでも東京市長の代理で、今回の五輪開催国を日本に導くべく友邦ドイツのヒトラー総統に働きかけての帰路だった。

寺崎にとっぴまもって印象ぶかく思いだされるのは、磯村に駐英大使の吉田茂を紹介

したとき、磯村がヒトラーを表敬訪問したと知った吉田の不機嫌ぶりだった。しかし、ヒトラーが実際はヒゲも蓄えておらずなよなよと女のように、握手をしたとき、これが人間の手かと訝しくおもわれるほど冷たかったと磯村から聞かされたたん、吉田は上機嫌になった。大使の吉田ともども英米派で反独逸派だった寺崎も大いに愉快になって、「やっぱりヒトラーと組むのはだめだ」との思いを強くしたものだった。

その晩は、寺崎は磯村と夕食をとりながら、芝中時代の思い出話で盛り上がった。ふたりにとって共通の大事事件といえば、なんといつても大正五年二月九日の不審火による校舎の全焼である。明治四二年（一九〇九）入学一〇回生の寺崎は当時最終学年の五年生、いっぽう大正元年（一九一二）入学一三回生の磯村は二年生だった。

まずは寺崎がリードをとるかたちで、あの大事事件の顛末を語りあった。三年先輩の寺崎

を磯村が立てたということもあるが、それよりも当時の芝中在校生六百人弱のなかで、寺崎が貴重な体験をしていたからだった。

あれは卒業試験の十日ほど前の深夜二時半頃。寺崎は青山高樹町の自宅で明日の予習を終えてちょうど寝入ったところだった。外からガラス窓を激しく叩く音で目が覚めた。何事かと窓をあけてみると、同級生の某ではないか。「たいへんだ、学校が丸焼けだ」と息せききった声でわめく。彼の家は芝中から指呼の間にある芝巴町なので、母校の大事をその眼で確かめることができたのだろう、これは大変だと親友に伝えにきてくれたのである。深夜なので、市電も市バスも動いていない。息を切らせているところから察すると、走ってきたらしい。寺崎は親友の熱情を意気に感じて、よしわかったと応え、戸締りを弟に託して、友人とともに、母校へと大急ぎで向かったのだった。青山通りを通り、六本木を経由し飯倉をぬけ、神谷町の交差点を

折れて、校門への坂道を登りつめて驚いた。すでに火の手は消えていたが、オランダ大使館の木立の直ぐうしろに見えていた学校の校舎のかげもかたちもない。運動場に入ってみてまた驚いた。残っていたものは、屋内体操場、興国殿、銃器庫だけだった。

ここまで語って寺崎は一息いれた。そこで、磯村がすかさず、海旭の話をもちだした。寺崎とは違って、いつものように定時の始業時間に学校へやってきた磯村は、焼け跡に黙然と立ち続ける海旭の姿にうたれた。その姿から「たとい校舎が焼けようと、人は焼けないのだ」という声なき声を聞いた気がしたという。

焼けた グラントピアノ

たしかにあのときの海旭の態度は寺崎にとっても感動的であった。多くの芝中生を感動させる語り草となった。しかし、寺崎には海

旭は「脇役」でしかなかった。海旭をしのぐ「主役」がいて、それがなければ、寺崎にとって芝中焼失事件はあれほど忘れたいものにはならなかったろう。磯村はまだ二年生だったのでそのあたりの事情をよく知らないようだった。そこで寺崎は、その顛末をとつていつ語ってきかせた。

誰よりも早く母校へかけつけた寺崎は、海旭が焼け跡に立ち尽くして無言で生徒たちを督励する以前に、ハンケチで鼻をおおいながら焼け跡からなにかを一つ一つ丁寧に拾い上げる人物を目撃していた。その男とは、音楽教師の島田英雄。拾いあつめていたのは、無残に焼け爛れたピアノの鍵盤だった。島田は上野の音楽学校（現在の東京藝術大学音楽学部）を首席で卒業したという触れ込みで、芝中学校校歌の作曲家であった。

当時の芝中では三年まで音楽の時間があつたが、ほとんどが上級の高等学校をへて大学へ進む生徒たちにとって、音楽など無用の代

物だった。また当時の男子の間ではパンカラを愛する気風が強く芝も例外ではなかった。だから、島田が熱心に教えようとすればするほど、生徒たちは小馬鹿にして、授業にならない。音楽教師・島田は生徒たちに弄ばれる対象ではあっても、尊敬される教師ではなかったのである。思いあまつた島田は、授業中に悔し涙を流すことさえあったが、残酷なことに生徒たちは、「泣き虫島田」とはやし立てるばかり。

焼け跡で鍵盤を拾う島田の姿を寺崎がよくみると、ハンカチで鼻をおさえていると見えたのは、火事場の臭いを避けるためではなく、ピアノを焼き失った悲しみの余り、流れ落ちる涙をおさえ隠すためであった。寺崎は感動し、それまでの島田への接し方を大いに恥じた。

同窓生も三々五々集ってきて、寺崎を筆頭にこれまで島田をコケにしていた悪童ほど感動を覚えた。「あの泣き虫島田、また泣いて

らあ」などと小馬鹿にするものは一人もいなかった。この時から島田の評価は反転。このエピソードは生徒たちの間につたわり、島田先生のためになにかをしてやろうという世論がわきあがってきた。その火元は寺崎だった。最終年次生は、毎年寄金をつのつて、卒業記念の品を母校に寄附して行くのが慣習であった。その年は大火もあったことだし消火器にでもしようかなどと言う不埒な輩もいたが、寺崎とその仲間たちから「ピアノを買って学校に寄附し島田先生を慰めよう」の提案があり衆議一決。しかし、グラランドピアノとなると、例年のように、卒業生一人当り五十銭ではまかないきれない。

そこで、寺崎のアイデアで「芝中復興慈善音楽会」を催して基金を捻出することになった。仲間の親や親戚の手づるをつかってプロに無料出演を依頼。当時の憧れの的だった三越少年音楽隊、声楽家の長坂好子女史のような大家の出演にこぎつけた。寺崎少年にとっ

てはそれからが忘れがたい冒険だった。慈善音楽会となると所轄の警察署に許可を得なければならぬ。寺崎は仲間と二人で警察署へ赴くと、係官から「慈善音楽会の名で詐欺を働く輩がいる。予定額を定め、純益がそれに達しない場合は、主催者がこれを負担することになっている」と言われた。今さらあとへはひけない。寺崎は清水の舞台から飛び降りるつもりで、「六百円にします」と請合った。それで許可がおりて、めでたく開演となった。当日は一般の客を優先するために在校生の一部には退場してもらうほどの大盛況。プロგრラムの最後は寺崎たち七名による芝中校歌のハモニカ合唱。会場から一斉に拍手がまきおこり、寺崎は演奏しながら涙が流れて止まらなかった。興行的にも大成功で、グラランドピアノの他に新しい校旗まで学校に寄附でき、寺崎は六百円の尻ぬぐいを父親にしてもらわずにすんだのである。

いま振り返れば、これは寺崎の外交官デビ

ューのようなものだった。これで寺崎は交渉術の醍醐味を知ったからだ。海旭も会場に静かに控えていたが、主役は島田とグラランドピアノであった。いまもって寺崎にとって、海旭は偉いけれども遠い存在なのは、島田が外交官デビューのきっかけをつくってくれたという思いがあるからなのかもしれない。

父親にばれて 野球をやめる

さらに、その夜の話題は芝時代から東大時代へと及んで、二人は海旭との距離感の対極的な違いを気づかされることとなった。

磯村は関東大震災の年に東大に進んで救貧活動のセツルメントにのめりこむが、これは芝中時代に海旭の慈善事業から影響をうけたものだと言った。出世主義の小役人とはかり思っていたが、貧しい人を助ける活動を大学を出て役所勤めをしてからも二足のワラジでやっていると聞いて、見上げたものだと言

は感じ入った。

いっぽう三歳上の寺崎は一高・東大では野球にのめりこんだ。寺崎は小学生の頃から、プレーの夢を毎夜のように見るほどの野球少年だった。キャッチャーとして二塁を盗まんとする走者を刺そうと、横で寝ていた母親の髻を球代わりにつかんで起こしてしまったことさえあった。しかし、野球を楽しみに進学した芝では野球はご法度。だから五年間も野球に飢えた末に入った一高では迷うことなく野球部へ。当時はプロ野球はまだなく、学生野球が花形スポーツだった。チームメイトには左腕で鳴らし後にプロ野球コミッショナーとなる内村祐之がいた。父親が野球を許すはずもなかったもので、内緒でやっていたのだが、芝出身の先輩のマネージャが気をきかせて、学習院戦で殊勲を挙げた寺崎の名前が新聞に出てしまった。それを知った父親に「西洋タマ投げをさせるために最高学府に行かせているのではない」と烈火のごとく叱られ、

野球を辞めるはめになった。その結果、難関の外交官試験にとおることができ、後に感謝することになるのだが、そのときは大学野球をやめさせた父親と野球部を認めない芝中の校長・海旭とは似た者同士だと怨んだものだった。

寺崎は、同じ芝の同窓でも海旭への距離感がこれほど違うのかと思ひ知らされた。海旭を偉いけれども遠い存在にしか思えない自分がちよっぴりなさけなく、海旭から影響をうけ海旭を身近に感じている後輩の磯村がちよっぴりうらやましくもあった。

(つづく)

御礼

渡辺海旭師が住職をつとめた両国・西光寺（古宇田亮順住職）より、此の度金壹百万円のご寄付を頂戴しました。この場をかり厚く御礼申し上げます。

（編集部）

弥陀の本願を深く信じて、念仏して往生を願う人をば、弥陀仏よりはじめたてまつりて、十方の諸仏菩薩、観音勢至、無数の菩薩、この人を開遠して、行住坐臥、夜昼をも嫌わず、影のごとくにそいて、もろもろの横悩をなす、悪鬼悪神の便りをはらいのぞき給いて、現世にはよこさまなる煩いなく安穩にして、命終の時は極樂世界へ迎え給うなり。

(法然上人『浄土宗略抄』)

阿弥陀さまの本願を深く信じ、お念仏して往生を願う人には、阿弥陀さまをはじめあらゆる世界のみ仏や観音・勢至両菩薩をはじめ無数の菩薩が取り囲んで下さり、その人が歩いていても止まっても、座ついても横になつても、四六時中、いついかなる時も影が形に沿うようにお護り下さり、さまざまの悩みや煩いをもたらそうと忍び寄る悪鬼悪神の触手を払い除けて下さり、命あるうちは理不尽な煩いごとなく心穏やかに、命尽きるときには極樂世界へ迎え導いて下さるのです。

「鬼は外、福は内！」——お念仏の声の中に——

二月といえば節分です。そもそも「季節を分ける」ことを意味する節分は、各季節の始まりの日（立春・立夏・立秋・立冬）の前日のことで、年に四回ありました。その中、広く江戸時代以降は、特に立春（毎年二月三日頃）の前日のことを指すようになります。なぜ、冬から春への節分だけが、これほどクロ一ズアップされてきたのでしょうか？ これには、さまざまな要因が重なっています。

まずは、春の嵐・三寒四温など、この季節特有の不安定な気候変動とそれに伴う体調不良の増加があげられます。そして、これに陰陽道の鬼門おんやんどうの考え方が加わります。陰陽道では、北東の方位を鬼門といい、この方角は陰と陽との境にあたり鬼が出入りするとして、もつとも忌むべき方角と考えられていました。また、陰陽道では、東南西北の四方に春夏秋冬の季節が配当されています。すなわち、東は春、南は夏、西は秋、北は冬です。その中、冬と春との節分、つまり、北東の方角こそ鬼門の方角にあたっているのです。こうしたことから、特に立春の前日の節分が、とりわけ注目されてきたのです。

さて、節分には、鬼に豆をぶつけながら、「鬼は外、福は内！」と唱えて、悪縁を追い払い、一年の無病息災を願います。古来、鬼は、さまざまな悪縁、

とりわけ、死の象徴でもありました。ですから、そうした悪縁や死の縁がわが家に入ってこないようにと豆で鬼を追ひ払うのです。

ちなみに、私たちがイメージする一般的な鬼の姿は、頭に角を生やし、頑丈な身体をしています。また、口や手に鋭い牙や爪が伸び、腰には虎の毛皮のフンドシをまとっています。実はこの鬼の姿も、陰陽道で考えられた東南西北に配当された十二支が源流なのです。すなわち、子は北、丑は北東、寅は北東、卯は東……と配当される中、東北―鬼門―の方角は、丑の方角と寅の方角の中央にあたり、古来、艮と呼ばれています。この丑（＝牛）と寅（＝虎）のイメージ、すなわち、牛の角と頑丈な身体、虎が持つ鋭い牙と爪、虎の毛皮が、平安時代を通じて、少しずつ人々の間で融合され、次第に私たちが抱く鬼のイメージが確立されていったのです。

こうした鬼のイメージが形成されていった時代に生を享けたのが法然上人です。法然上人ご自身も、豆まきの原型であり、宮中や大寺院で広く行われていた追儺法要の様子はよくご存じだったことでしょう。もっとも、法然上人が鬼の姿について語られたお言葉は見出せませんし、仏教が捉えている広い鬼の概念と私たち現代人が抱く鬼の概念が必ずしも一致するわけではありません。

とはいえ、冒頭の法然上人のご法語のように、諸仏諸菩薩は、忍び寄る悪鬼悪神の魔の手から私たち念仏行者をお護り下さり、加えて、現世後世にわたる心からの安らぎを与えて下さるのです。そればかりか法然上人は、冒頭のご法語に続けて「仏に帰し、法に帰し、僧に帰する人には、一切の神王、恒沙の鬼神を眷属として、常にこの人を護り給うといえり」と、お念仏を称え、仏・宝・僧の三宝に帰依した念仏行者に対しては、諸仏諸菩薩だけでなく、すべての鬼神たちが幾重にも取り囲み、常にお護り下さる、とお示しなのです。

「鬼は外、福は内！」節分の日、それぞれのお宅で元気に響き渡る豆まきのかけ声に込められた切なる願いは、実は「南無阿弥陀仏」というお念仏の一声一声の中に叶えられていく願いに通じているのです。 合掌

（林田康順）

第三十三回

江戸を歩く



下谷から浅草へ

森清鑑

大江戸ウォーカー

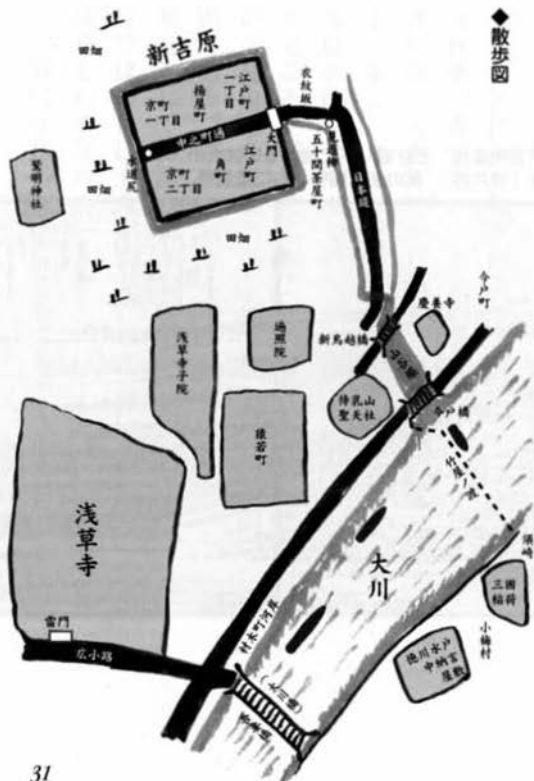
浅草の俠客、新門辰五郎

幕末、浅草寺伝法院の新しい通用門、新門の番人を任された人物が新門辰五郎である。当時、寺社内の警護は目付の管轄外であったので重要な役割であった。特に伝法院は寛永寺歴代貫首の輪王寺殿の隠居場であったからこれは皇族にも直結する警護である。

辰五郎は町火消し「を組」の頭であるが大変な任侠の人物で上野下谷から浅草までを受け持ち、彼を慕う子分衆は三千人もいたといわれる。大名火消しとの間で起きた喧嘩騒ぎなどでも彼が仲裁に入り立派に治めた。その義理と度胸の潔良さには、將軍慶喜も勝海舟も舌を巻いたという。そこには絶大な信頼を寄せた交友がある。海舟は西郷との談判がもし決裂した場合には江戸に火を放ち江戸の人々を救う警護を彼に託している。彼は海舟にとって最も親しい人物であった。慶喜も同じである。慶喜公上洛の際には京都二条城で

警備。鳥羽伏見の戦いの後、江戸に帰った慶喜が大坂城に残した、神君家康公以来の徳川総家の証し、「金扇馬標」を取り返したのも辰五郎である。江戸でも慶喜を守り、上野の戦争では寛永寺伽藍の防火に務め、慶喜が水戸、駿河に謹慎すると同行して警護をしてい

◆散歩図

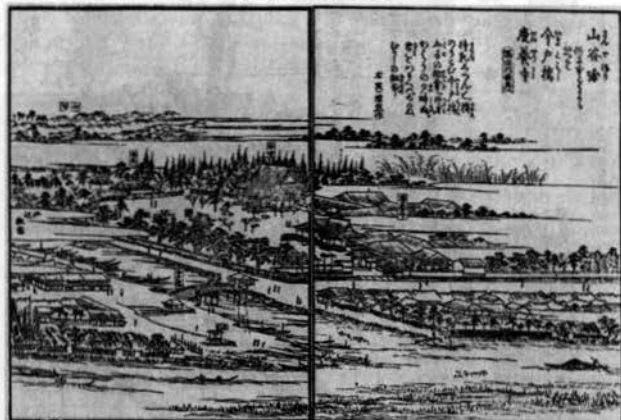


る。駿河では威臨丸が官軍の攻撃を受け多数の徳川方の死者を出した。海に浮かぶ死体にだれも手を出せぬ。この時、死ねば仏と遺体を回収し、葬ったのが清水の次郎長である。彼も海舟に信頼された一人。次郎長に後事を託し辰五郎は江戸に帰る。この激変の時代に義を貫いた人物といえよう。テレビドラマ「暴れん坊将軍」に登場する火消しの親分、「め組の辰五郎」は、時代も組名も異なるがこの新門辰五郎をモデルにしていると思われる。序でながら新門辰五郎の末裔は今も浅草寺に関与しており、三社祭りでの重要な役を全うしている。

吾妻橋から吉原へ

長さ七十六間の吾妻橋は江戸町民が造った橋である。数ある大川を渡る橋は、幕府が拵えたものだが、吾妻橋だけは異なる。そこで幕府が大川橋と命名したものの、江戸っ子はそれに抵抗するかのように吾妻橋（東橋）と

◆江戸名所図会 三谷堀 下に流れるのは大川。
左中央「今戸橋」、堀の左に船宿、右に慶養寺。



呼んだ。そしていつしかその名が定着した。

橋の麓の材木町河岸から猪牙船に乗って、大川を北上する。花川戸町河岸を過ぎると広い大川の右対岸は水戸中納言の蔵屋敷である。辺りの景観は真によい。殺生禁断の寄州と陸の間を抜けて行くと左岸は瓦町河岸。今

戸橋を潜って山谷堀を上る。そこに有名な船宿「竹屋」があった。この船宿から大川対岸の小梅村、三囲みめぐみ稲荷に行くコースが竹屋の渡しである。小梅村須崎から美しい桜並木が連なる。江戸の風流人がこよなく愛した渡しである。何でも船宿竹屋のおかみが客を呼び込む声が大きく、評判になりいつしか人々は竹屋の渡しと呼ぶようになったとか。

今戸橋に向かつて左一帯が待乳山まちちやうやま聖天社である。この小高い山の上からの眺望は江戸でも指折りの景色。眼下に滔々とうとうと流れる大川。その対岸は向島深川の美しい景色。西に振り返れば上野の山並み、その左に富士山が聳そびえ、大川の北を眺めれば筑波山。あまたの画家や書家が題材とした処である。

待乳山聖天は浅草寺の子院で、その起源は推古天皇九年（六〇一）。千ばつで苦しむ処の人々を救ったのが十一面観音。以来、江戸の人々は「聖天さま」と呼び、信仰を集めた。江戸が始まるまでの待乳山はもっと高い山で

あったが、家康は大川の氾濫を防ぐためにこの山を削り西に向けて大堤防を造った。これが日本堤である。この待乳山の西裏側が聖天町。そして聖天町と浅草寺子院群に挟まれた一帯が、歌舞伎三座が集まっていた猿若町である。

芝居街、猿若町

猿若とは中村勘三郎のこと。この中村座と市村座、森田座が、火災がきっかけで日本橋葺屋町（人形町）から移転してきたのが天保十二年（一八四一）。時あたかも水野忠邦の天保の改革。すんでの所でお取りつぶしになるところを浅草に移転ということで救ったのが「遠山の金さん」こと北町奉行、遠山金四郎である。以来、金さんは江戸っ子を救う名奉行として物語の主人公になった。この芝居町では一日に千両が動く形容されるほどで浅草をして江戸の一大テーマパークたらしめた。特に江戸の女性にとってその人気は絶大

で芝居見物に行く日には、わくわくして夜もろくに眠らず化粧、着付け。夜明け前に出て、遠路はるばる、明け六つ（午前六時）に始まる興業に間に合わせる大騒ぎ。江戸川柳にいわく「芝居へは向こうのめりで娘ゆき」。広重も「猿若町三芝居図」で、森田座前の、その凄まじい賑わいを描いている。特に一階敷敷席は富裕層の指定席。役者の息づかいまで聞こえるようで、この後の芝居茶屋まで含めれば今の金で十万以上かった。座敷の設定から見ると、芝居ばかりは身分の差別など無く、観客は武家から町人まであらゆる階層に及んでいる。

左に待乳山、右に今戸町、慶養寺を眺め、三谷堀を北上する。この辺りの風情は江戸の情緒を代表する。吉原に行き来する舟で一杯である。ほどなく新鳥越橋を渡る。すると左手に日本堤が見えてくる。これは大川の氾濫から町を守るために江戸初期に築かれた堤防であるが年月が経つ内に実にすばらしい景観

となった。広重の「日本堤」は、吉原に行き交う駕籠、葦簀張りの茶店、木々の織りなす美しい姿を生き生きと捉えている。

葛飾北斎

新鳥越橋の左岸に西方寺、隣接して浅草寺。寺中の遍照院がある。広い寺域を囲むように家々が入り組んで在る。日本、いや世界に冠たる画家、葛飾北斎はこの遍照院の裏店で赤貧のうちに生涯を閉じた。

北斎版画のオリジナルティは現代の人々が見ても斬新である。彼はあらゆる題材を絵にしたが、そこにはいずれも北斎ならではのオリジナルティが息づいている。北斎漫画に見られるデッサン力は、レオナルド・ダヴィンチのデッサンを彷彿とさせる。フランス印象派のドガにも多くの示唆を与えている。「富嶽三十六景」も人間が見た、その場の景観を見事にディフォルメさせている。その一方で北斎は非常に写実的な画業を行っている。彼

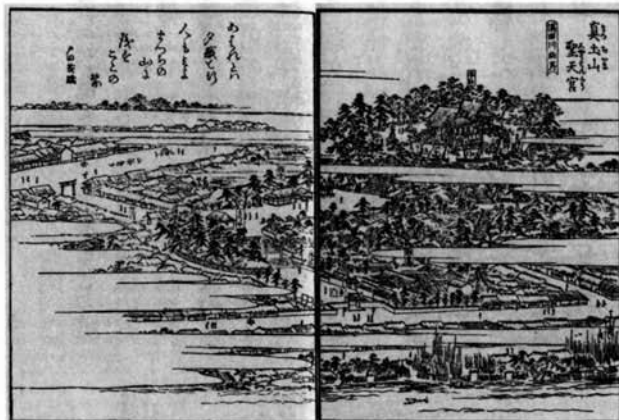
の芝居小屋風景を立体表現した紙絵の組立てなどがそうした例である。架空の物語を絵に定着させた恐るべき画力。それを数々の絵や信州小布施、岩松院の天井に描いた巨大な「八方睨み鳳凰図」に見る。これは正に昇華された世界である。

北斎は宝暦十年（一七六〇）ほんじょうりけすい 本所割下水で

生まれ、嘉永二年（一八四九）九十才で、遍照院境内の裏店にて没する。当時としては法外な長生き。この間に数知れず住まいを替え、生涯清貧であった。正に、「人生ひとつのことをやり遂げればよい」の典型で、生活面でやるべきあらゆる常識を排除し、ただひたすら長い生涯を死ぬまで絵を描くことに燃焼させた。自ら画狂人を標榜し、亡くなる少し前に「あと五年寿命があればもっとうまい絵が描けるのだが」とつぶやいたという。その人生の本質を突いた言葉に多くの啓示を受けるのである。彼はまさに江戸文化、否、世界を代表する画績を残した。

山谷堀は日本堤を挟んで小幅な川となり、北上する。その行き着く先は飛鳥山の端を流れる音無川である。左右に川の流れを見て日本堤を歩くと左手に一本の大きな柳がある。人呼んで「見返柳」。吉原で過ごした想いをこの木にかけて江戸人はふり返った。そこは

◆江戸名所図会 待乳山聖天社。絵の下、大川。



広場になつており、高札が立てられている。衣紋坂を下りつつ、その名の通り、身だしなみを整え、左右に連なる五十間茶屋を過ぎると、黒塗りの大門おもんが聳えている。さあ、ここを潜れば、天下に冠たる新吉原の歓楽密集地帯が待っている。

新吉原

広い田圃たんぼの中に忽然と形成された四方からなる歓楽街。これが新吉原である。日本橋葺屋町（人形町）に庄司甚右衛門が築いた遊楽街、元吉原が振り袖火事（明暦の大火）で焼失した後、この浅草田圃に移転したのが新吉原である。大門を潜ると碁盤の目のようなつづら折りの町並みが展開する。まずは江戸町一丁目、二丁目。序で揚屋町、そして京町一、二丁目。この碁盤の町の周囲全体を幅約四メートルの細長い川が囲んでいる。色町の出入り口は大門一本のみ。この川は、いわば堀の役目を果たしている。通称、「おはぐろどぶ」。

遊女がこの川で、「おはぐろ」を落とし、黒い濁りがあった。遊郭を二つに割るように大門から真つ直ぐ伸びている中央目抜き通りが仲之町通。道の果てに水道尻があり、火の見櫓が建っている。川の向こうは広い田圃。はるか先に、今日でも名高い鷲明神社ささめが忽然と見える。最盛期、遊女三千人。遊郭を支える人一人がここに住み、雑貨、食料品店、本屋、質屋、銭湯までが揃っている不夜城。ここばかりは治外法権が通用し、吉原文化とも呼べる世界を醸成した。

当初は武家が上得意の客であつたが、元禄期ともなると材木商や札差など財を成した商人がこれに代わる。紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門はその代表格である。遊女には階級があり、大籠おおかご（大見世）、半籠（中見世）、惣半籠（小見世）。それも遊女屋の格によつて揚げ代が異なる。しかも、これに加えて茶屋への手数料、芸者への祝儀、飲食代、紙纏かみば頭（チップ）など揚げ代の数倍の費用がかか

った。高級格の遊女と一晚遊ぶためには、結局、現代の金にして四十―五十万円。さらに、遊女と一夜結ぶためには、初会、二会目、三会目でやっと馴染みとなる。浮世絵の版元として有名な蔦屋重三郎は、吉原で遊ぶための情報誌「吉原細見」を毎年発行し、地盤を築いた。これには時と共に変わる遊女の名と位、揚げ代などが克明に記されていたのである。

最高レベルの花魁おいらんともなれば、顔、容姿、床上手はもとより大変な教養が求められる。現存する彼女たちの文面の粋なこと、その達筆さには驚かされる。吉原で遊ぶと言うことは江戸の男達にとって最高に粋なこと。当然、落語の格好の話題になる。「明烏あけぐら」や「紺屋高尾なつかお」はその代表的な噺。

まずは「明烏」。さる日本橋大店のせがれ、時次郎。真面目人間を絵に描いたような奴。十九というのに女と聞いただけで鳥肌が立つ。堅いにも限度がある。これでは世間付き合いに差し支える。心配した親父。吉原に

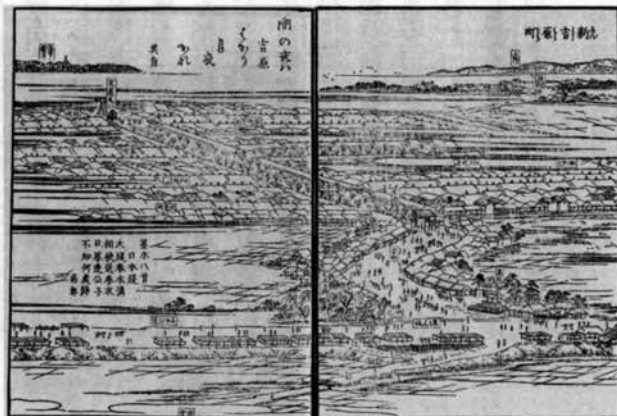
でも連れて行って遊びの手ほどきをしてくれないかと、町内きつての遊び人源兵衛に頼む。お稲荷様へのおこもりとこまかし、「いいかい、お賽銭が少ないと御利益がないから便所にも行く振りをしてお前が全部払ってしまいなさい」と言い含め送り出す。しかし、いかにうぶな倅でも吉原に行けば、ここが女郎屋ということが分かる。帰ろうと泣いて駄々をこねるのを聞いた源兵衛。「このまま帰ればさつき通った大門で怪しまれ、二―三年は会所に留められ帰して貰えないよ」とおどす。若旦那、泣く泣く部屋に納まると、やがて担当の花魁の登場。これが絶世のうら若き美女。その彼女が腕によりをかけてサービスしたからもうたまらない。若旦那一カ所を除いてとろとろ。一方の源兵衛は敵娼あいかたに振られ、ふてくされて朝を迎える。帰ろうと若旦那の部屋に行くときまだふとんの中。「花魁があたしの手を押さえて離してくれない」とおのろけ。頭に來た源兵衛。「それなら、坊ちゃんはお

なんだから、ゆっくり遊んでいらつしやい」と帰ろうとすると若旦那。「帰れるものなら帰ってごらんさい。大門で留められる」。堅物が実はもてる、という廓ならではのいい斬である。

もうひとつ、「紺屋高尾」。神田紺屋町の染め物職人、久蔵。これまた遊び一つ知らず、真面目一途の男。それがこのところ患って寝っぴているので心配した親方が医者に診せる。この医者、藪医者だが粹な人。一目見るなり「お前のは恋煩いだな。相手は今吉原で全盛の三浦屋の高尾太夫と違うか」。ずぼしをつかれた久蔵、びっくり。分かるのも当然。太夫の錦絵が辺りに散らばっている。「先だって、話の種だと友達に誘われ生まれて初めて吉原に行き、花魁道中を見て参りました。この世のものとも思えない、高尾太夫の美しさに魂を奪われ、何を見ても高尾に見える。一生に一度でも買ってみたが、太夫の相手は大名クラス。とても無理」と告白。すると

◆広重絵「よし原日本堤」中央右隅に見返り柳。その上新吉原の家並み。

◆江戸名所図会 新吉原 左下日本堤。見返り柳を左に曲がり、衣紋坂を下ると大門。



医者の先生。「会わせてやっても良いが初会に座敷に呼ぶだけでも十両はかかる」。これは久蔵の三年分の給料。しかし、それからというものの久蔵にわかに元気が出て三年間というものの一心不乱に働いて貯まった金が九両。親方が足し前くれて十両にはなったが紺屋職人では相手にしてくれない。親方やお医者先生が協力して立派な帯、羽織を揃えてくれ、さるところのお大尽というふれこみで茶屋に掛け合う。下手なことを口にすると思元がばれる。何を聞かれても「あいよ、あいよ」で通せと先生。部屋豪華さに呆気にとられて、いと、折良く高尾太夫の体が空いていて、しずしずと登場。傾城座りといつて少し斜めに構えて長煙管で一服つけると「お大尽、一服のみなんし」。久蔵、思わず「へへーっ」と平伏。太夫ともなると初会で肌身はゆるさない。本日はこれで終わり。太夫、型どおりに「主はよう来なましぬした。今度は何時来てくんなます」。これだけで十両が吹っ飛んだ。

今度といわれても三年後。その間に高尾が身請けでもされようものなら、ことはお終い。久蔵、今生の別れだと感極まって、自分の素性やこれまでの経緯を洗いざらいしゃべってしまう。ところが妙なことが起こった。それを聞いて怒るところか感激したのは高尾太夫。「金で枕を交わす卑しい身を三年も思い詰めてくれるとは」。久蔵の一途さに心を動かした。「来年には年季が明けます。そしてら女房にしてくんなますか」と言われ、久蔵、感激の余り泣き出した。この高尾太夫が紺屋のかみさんになって店は大いに繁盛したという、めでたい嘶である。

【参考文献】

- 「広重の大江戸名所百景散歩」人文社
 「江戸の風景」、「江戸の遊び」(株)双葉社
 「江戸史跡事典」下巻 新人物往来社

佐藤春夫



優美と才能と
健康を兼備

——子供にわかるお話——

阿弥陀さま (六)

最終回

この国の人々はこの国に生れる前は、我々が母の胎内にいるように大きな蓮の花の苔つばきのなかに閉じ籠められていて、その花が開くと一しよに浄土に生れ出て来るのです。その神聖な清らかな花の苔のなかにいる間に我々普通人のさまざまな賤しい欲を清められて、この不思議に立派な国の人となるに適当な性質につくられているものと見えます。こうして生れ出たこの国の人々は全身金色をしていて男女の区別

がないばかりか、どの人々もみな同じような立派に美しく、美醜の差別はありません。

三十二大人相を具えて全身申し分なく端麗につり合いがとれているばかりか天上の力士
那羅延ナラエンのように壮健で大力です。この理想的健康体の上に智能はあらゆる真理を知り、またその真理を述べる場合には思うところを言い尽くせないところのない雄弁の才を持っております。弁舌ばかりでなくいろいろな才能を恵まれているなかで特別に挙げられているものは、天眼智といつてありとあらゆる諸仏の国々を居ながらに見る能力や、天耳智といつてありとあらゆる諸仏国の仏説を居ながらにして聴いて楽しむことが出来るとか、自分の宿命や他人の心のなかを見抜くなどの能力さえ備わっているのです。また神足通といつて諸仏を供養する目的なら食事をする位のごく短い時間に諸仏国をすっかり一まわりして来ることも出来ると言われています。つまりは修養の足しになることならば何でも、居ながらに見たり聞いたりすることも出来るというわけで、テレビジョンやラジオと同様でそれ以上に精妙な機能が浄土の人々の体のなかには具わって生れついているようなものです。稲妻のように速い飛行も出来るのです。しかしそれらの才能がみな仏教の教えのための修行にだけ使われ發揮されてその他の場合には妄りに使われるものでないのです。この国のすべての文化を挙げてどこまでもこの国の肇国の精神に基づいて発達しています。そこにこの国の特有の文化があるように見えます。人々は智能と健康とをこの上厚く恵まれてこの特有の文化に浴しつつ刻々に成仏の修行を積んでいます。

優れた浄土の衣食住は

本来は精神的な国ですが、人々が住んでいる以上は衣食住に関するこの国の事情も多少は知っておきたいものです。気候はいつも穏和で春秋夏冬なく、寒からず熱からず常和調適というからいつも人々に快いものなのです。それでも国中の人々が衣服の必要を感じた場合には直ぐさまこの国の体制に適った衣服が自然に身につけられる。これは格別に裁縫したり、洗濯したりするのではないのであるという。希望に応じて相応の国民服が支給される制度でもあるものなのです。住居は、まるで宮殿のような上に、衣服飲食もろもろの妙華香莊嚴の器は、さながら天界でも最もすぐれて美しいと言われる第六天の自然の物に似ています。もし食べたいと思うと七宝の食器が自然に目の前へ思いのままに現れて来て、さまざまな御馳走が食器の上に乗って来るのです。この食物があるけれど、誰も食べるでもなく、その色を見、香をかいで、食べたと思うともう食欲が満足します。食欲などもごく淡泊になっているのでしよう。食べもしないで飽食すると食器は自ずと消えて行ってしまう。時刻になるとまた出て来ます。この仏の国は万事清らかに静かでも言われない楽しさです。人間のいろいろの欲心がよく調和され節制されたからでありましょう。そうしてこの国で快樂というのも、たとえてみると一日の仕事を終った夏の夕方一風呂浴びて、ゆかたを着かえた時のさっぱりと爽やかな気分に似たような性質のものと思えばよろしい。

旧仮名遣いを全て現代仮名遣いに直しました。
また、幾つかの言葉を現代用語に改めました。
(編集部)

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●様

〔特選〕

初句会何様何々様並ぶ

大谷三津子

結社の例会など、三四十人は居るのだろう。

初参加のことで末席に座す。先輩が上席を指して一人一人名を挙げる。会では名の知れた人ばかりである。「何様何々様」がよく効いていて、面白い句になった。

〔佳作〕

仕様書と云う難解なもの年詰まる

金谷 友江

一様に並ぶ搭乗口寒し

新島 朱音

様々な冬木立選る庭師の眼

石原 新

●手

〔特選〕

じゃんけんで手順決めたる雪おろし

北野 雄策

テレビでしか知らないが、雪おろしは大変な作業である。「手順」とあるが、作業の場所から何から、じゃんけんで決めるというの

だ。誰も進んでやろうとはしないのだろう。
さてどういふ番になったのだろう。

〔佳作〕

他愛なく素手もて打たれ冬の蠅

中島富士子

秋天や手招きのごと風車回う

井村 善也

手話交わす少女の赤き毛糸帽

浜口 佳春

●自由題

〔特選〕

風邪薬いろいろ替えて長びきぬ

寺下 忠至

変なインフルエンザではなさそうだと、と
りあえず買い置き薬を飲んでおいたが、ど
うも直りそうもない。結局あれこれ試してみ
ることになってしまった。風邪はなかなか直
らない。覚えのある人も多かろう。

〔佳作〕

海に浮き雪晴るる峯利尻富士

工藤 淨真

朝のせり小蛸汐吹く網袋

斉藤 幸雄

諸畑収穫済みし海女の国

増田 信子



浄土誌上句会のお知らせ

兼題
季語ではありません

響流自由題

誌上句会〈編集部選〉

■様

走る様にひと歳迅し冬至柚子
様変りして禅寺は雪囲い
落栗の人待つ様にかがやけり
磯菊や様々に落つ落とし水
空模様除雪車待機朝の使者
湖は雨水の様となりけり
白鳥の様な女人や昇降機
コスモスや風に波うつ色模様
様と書き文に追伸風邪見舞

中島富士子
佐藤雅子
河合富美枝
前島格也
工藤浄真
仁科雄一
雨宮敦子
浜口佳春
増田信子

締切・二〇一〇年二月二十日

発表・『浄土』二〇一〇年五月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■手

手袋の指が突つつく手水鉢
露座仏の御手に宿る牡丹雪
子に貰う絵手紙冬至南瓜かな
朝寒の御堂手さすり弥陀拜す
かじかみし両手に受けし柚子茶かな
母の手に遥か浄土の夢を見る
ストーブを挟んで手話の早さかな
手袋を脱ぎて握手の月明かり

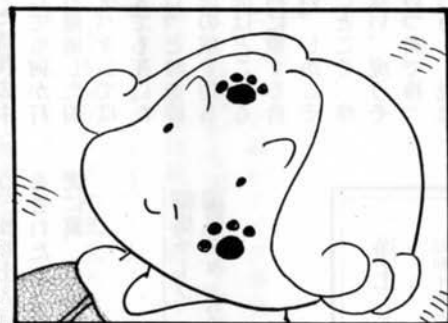
佐藤雅子
河合富美枝
金谷友江
工藤浄真
前島格也
飯島英徳
庄司早苗
斉藤幸雄

■自由題

犬猫の名も連なれる賀状かな
天啓と思ひし冬の月満ちて
柿ひとつ陽のぬくもりに浸りをり
ビードロの工房眼下に冬紅葉
下駄はいて門あけに行く黄落期
石路の花ゆつくりと去る母の家
寒雷やもうひとつ割る生卵
椅子の背が着て看護師のカディガン
口下手は母似か仰ぐ冬の星
忘年会酒に丸して申込む

中島富士子
佐藤雅子
河合富美枝
金谷友江
前島格也
蓮杖幸恵
革名 徹
長瀬亜美
吉崎美和子
東 保

かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



立春は夢が膨らむ球の音

岱潤

球春の季節を迎え、各地でプロ野球の話が聞こえてきた。今年は寅年だから、寅キチの筆者としては、つい夢を持ってしまうわけだが、そこは少しひねっているのがこのチームのファンで、あくまでも優勝は夢として楽しむ術を知っている。そこに行くこと今野党第一党の党首は、「虎は千里行つて千里帰ると云いますから、昨年千里行つたところを今年は帰ってきます」などと、夢にもならないことを正月に言っていて、哀れにさえ思えた。その年のことを干支をもじっている云い方をするならば、ここまで先が見えず、

夢が持てなくなってしまう時代の中、虎の尾を踏む危険を冒しても何か打って出るか、それともむしろ難破した船に乗っている時の鉄則、ジタバタしてはいけないのだから、虎は飢えても死にたる肉を食わずで、泰然自若じつと時を待つともよしだろう。今の時代虎の威を借る狐となりたくても、そんな虎はどこにも見えず、むしろ虎を画いて狗に類する自分を知る羽目に陥りかねない。しかしそうして自分自身を自覚することこそ、浄土宗の生き方なのかもしれない。虎うそぶけば雲起こるを期待していつまで待ってもきつと虎は現れないだろうし、虎は死して皮を留め人は死して名を残すとい

う。法然上人ほど名を残した人は一体何をされたかといえ、念仏以外にない。虎に翼、人に念仏を心したい。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十六巻 二三月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年一月二十日

発行 平成二十二年二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 北山大超(焼津・光心寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝陽院)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(芝・天光院)
 脳博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大本山・光明寺)
 山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

無分散意

意を分散することなし
観無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

専念する行為は、
万人の尊崇に値する

知里幸恵はアイヌの女性。彼女は、明治政府が蝦夷地を日本の一部と定め、送りこんだ開拓団によつて追われた民族の生活圏の喪失に絶望しながらも、金田一京助博士の研究を助け、加えてアイヌの文化・伝承の文献化に心血を注ぎ、一生を捧げた生活は万人の尊崇に値する生き方です。

彼女の著した『アイヌ神謡集』（岩波文庫）を

読むと、この文献がアイヌ祭儀に演じられる動物の仮装舞踊劇から詞句のみを分離していく作業に、聡明な彼女は疑問を抱きつつ、悲しい宿命を感じていたようです。しかし、彼女はアイヌ民族の誇りを堅持し、その文化の文書化に、わき目も振りませんでした。

※アイヌ・モシリ（人間の住む静かな大地）のこと

法然上人鑽仰会の

本

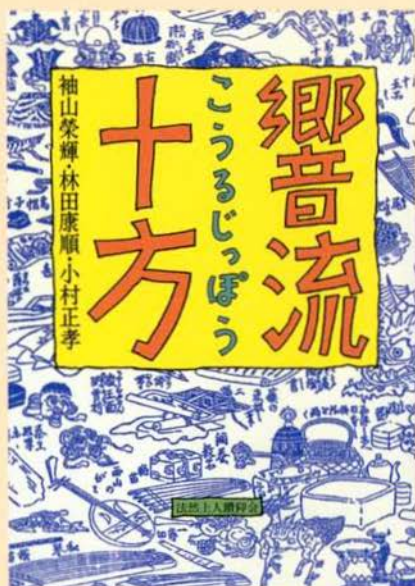
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

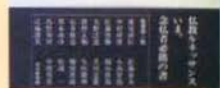
『差出人は法然さん』
600円



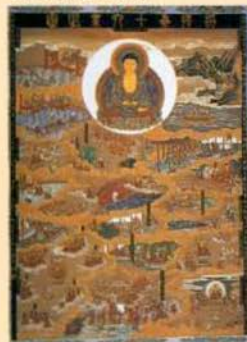
月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



巾額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より